

言頭卷

生老病死

学長 水谷 幸正

梅雨あけが遅れたので、今夏は凌ぎ易いと思っていたが、さにあらず、この稿を草するときはやはり酷暑である。例年のように、百日紅に心を安らげ、夾竹桃の紅花に目を瞠るが、この一年を顧みて、知己友人の逝去が多くなっていることに気付く。それにしても、一面また、日本人が高齢化していることも間違いない。

よく言われているように、高齢社会が顕在化してきているのである。これから、より一層この現象が進んでゆくことであろう。二十一世紀がどのような社会になるか、容易に予測はできないが、確実に言えることは、いわゆる高齢化社会になるということである。このことを見据えて、政治、社会福祉、医学などのあらゆる面からの対応が措置されつつあるが、老人問題の基本は、いわば人生の黄昏時における主体的な「生きがい」の確立にある。言いかえれば、死を前提とした生を如何に充実するか、ということになる。このことは生きとし生ける者すべての人々の究極の人生観として最も大事なことであるが、老人になるか、病人（死にいたる病）になって、はじめて自分自身のこととして自覚せしめられるのが凡人の常である。

このような社会的事情が一つの要因になっているのであろうが、最近とみに「死」の問題がとりあげられるようになってきた。「生死しやうじ一如いじよ」という仏教用語が端的に表わしているように、生と死は表裏一体であるから、生をぬぎにして死を語ることはできない。生（人生）が多種多様であるかぎり、それに相応して死に関するこ

とも画一的ではないが、近ごろとくに問題になっているのが「死の看取り」（看死）についてである。その具体的な例が、キリスト教系の病院が実施している末期癌患者のターミナルケア活動である。治療は病人が中心であって、人間性を無視してはいけない、言いかえれば、病気ではなく病人を治すのであるという立場からのケアである。死へのケアとしてとくに宗教者の役割りが重要視されている。

現代社会における僧侶の活動をみるに、まず第一は儀礼（とくに死後の祭式）であり、第二は教育活動や福祉活動をはじめとする伝道教化である。死人ないし死後を対象とするか、あるいは元気に生きている人を対象としている。それはそれでよい。しかし、看死こそ仏教者としてより重要な仕事ではないだろうか。末期癌の患者は勿論のこと、死にゆく人に対して、その人の心を和らげ、安んじて死途につくよう導くことが三界の導師なのである。事実、中世ごろまでは看死が僧侶の仕事であった。二十一世紀へ向かっての仏教の活性化は、枕経とは看死の説法である、と変容することにある、と言ってもよいのではないかと思う。このことが、釈尊の教えは生老病死の解決にあった、という仏教の原点にかえることになる。

では、生老病死の具体的な現今の課題ともいうべき、癌告知についてはいかにあるべきか。

仏教者の立場から、たてまえとして言うならば、告知すべきである、ということになる。人間はすべて「死への存在」であるということの自覚から、人生の真実にめざめ、いまのこの生を充実せしめることが、仏教の目的である。具体的に死を感じとったところから、人生の真実にふれることができることとすれば、告知はその一つのチャンスである、と言ってよい。しかし、これはあくまでたてまえであって、日本の文化、社会、宗教の現状からみて、告知は場合による、と言わざるを得ない。たとえ真実のことでも相手の為にならないことは語らない。しかし、真実で相手の為になるならば、たとえ相手に不愉快なことでもそれを語る、ということが告知の指針であり、ひろく説法の要諦でもある。